

平成 29 年度 第 1 回 豊岡市総合教育会議（定例会）議事録

○ 開会及び閉会の日時及び場所

平成 29 年 7 月 5 日（水）

場 所 豊岡市役所 3 階 庁議室

所在地 豊岡市中央町 2-4

開会時間 午後 2 時 00 分

閉会時間 午後 3 時 40 分

○ 出席者及び欠席者の氏名

出席者 豊岡市長 中貝 宗治

豊岡市副市長 森田 敏幸

豊岡市教育委員会

教育長 嶋 公治

委員 深田 勇

委員 中川 茂

委員 佐伯 和亜

委員 向井 美紀

欠席者 なし

○ 事務局等関係者の氏名

事務局 教育次長 丸谷 統一郎

教育総務課長 和藤 達也

こども教育課長 能登 琢也

こども教育課参事兼指導係長兼指導主事 飯塚 智士

こども教育課主幹兼指導主事 高田 健一郎

こども教育課主幹兼指導主事 河本 純子

こども教育課主幹兼指導主事 稲葉 裕治

こども教育課主幹兼教育研修センター所長兼指導主事 森山 健二

こども育成課長 宮本 ゆかり

こども育成課参事兼課長補佐 富岡 隆

こども育成課幼児教育保育指導係長 仲義 健

教育総務課参事兼課長補佐 正木 一郎

教育総務課教育総務係長 若森 和歌子

政策調整部長 土生田 哉

政策調整課長 熊毛 好弘

○ 日程

- 1 開 会
- 2 あいさつ
- 3 協議事項
 - (1) ローカル&グローバル学習の展開について
 - (2) 学校現場における業務の適正化について
- 4 その他
- 5 閉 会

○ 会議の概要

----- 開会 午後 2 時 00 分 -----

[日程 1 開会]

(教育次長)

ただ今から、平成 29 年度 第 1 回豊岡市総合教育会議を開会します。佐伯委員は少し遅れると聞いています。メンバーが少し変わっておりますので、総合教育会議につきまして私から説明させていただきます。この会議は平成 27 年 4 月 1 日に教育委員会制度が改革され、設置・開催が義務づけられたもので、市長が主催、招集することとなっています。今までは、経過措置で教育委員長と教育長とが併存するかたちになっておりましたが、今回は教育委員長と教育長を一本化した新しい教育長での教育委員会の体制となって初めての総合教育会議となっています。会議の構成員は、法律では市長と教育委員会となっていますが、こちらの運営要領により教育委員会事務担当の森田副市長にも出席を求めています。また、会議で活発な意見・協議ができますように、主催者の市長に代わりまして、司会進行につきましては、教育次長の私が担当させていただいております。なお、今日の会議は 1 時間半を目途としておりますので、よろしく申し上げます。

[日程 2 あいさつ]

(教育次長)

それでは、会議の主催者であります中貝市長よりごあいさつを申し上げます。

(中貝市長)

皆さん、お疲れさまです。今日のテーマの 1 つは、ローカル&グローバル・コミュニケーション教育の現状を踏まえた上で、全面展開が始まっておりますので、今後どうするかについて率直な意見交換をさせていただきたいということでもあります。

このローカル&グローバル・コミュニケーション教育は、豊岡市の地方創生戦略の中に大きな柱として位置づけられています。地方創生戦略というものは人口減少対策ですので、豊岡の人口減少の最大の要因が若い人の減少にある。いかに若い人たちに帰ってきてもらうか、あるいは留まってもらうか、という観点からとりまとめられておりました、その中にこのローカル&グローバル・コミュニケーション教育も位置づけられています。その意味では、これはまち

の都合です。別に子どもたちの都合のことから言っているのではなくて、子どもたちが少なくなつて、その原因は若い人がいなくなつていて、えらいこっちゃ、困つたなど。なのでどうしたらいいかという観点から、つまりまちの都合として、といつてもそれは実はまち全体の力が弱まると、将来の子どもたちの都合に関わりますから、単純にただまちのエゴイズムとかではないのですけれども、有り体に言うとそういうことになります。

しかし、同時に、これはただ単にそれだけのことではありません。子どもたちにとつても意味のあることだということも、もちろん当然のことながらベースにあります。教育委員会の側でこのローカル&グローバル・コミュニケーション教育を受け止めるときには、もちろん地方創生戦略の柱ということも、頭の隅に置いていただく必要があるのですけれども、基本は教育委員会としては、子どもたちにとってどういう意味を持つのか、そういう観点からしっかりと受け止めてやっていただければと思っています。特にこれからさらにグローバル化が進展すると、子どもたちは成長するにつれて本当に多様な人々と会うことになっていく。そのときに、ただすれ違うだけのことならいいのですけれども、同じ組織の中に共存したり、あるいは1つのコミュニティの中に一緒に暮らして、違う者同士が答えを出していかなければいけない。そういう場合に力で押し込めるのでもなく、お金の力でひっぱたくのでもなく、お互いの違いを認めた上で、なお対話を重ねていって、共同作業として結論を導き出していくという、そういった言わば社会的作法、これを今、日本はほとんど持っていないのですが、そういった社会的作法を身につけていかなければいけない。そういった観点からも、とても大切なことだと思います。

その上でさらに、とは言いながら、例えば豊岡のことをよく知ってもらって、地域への愛着につなげ、誇りにつなげていこうという目的は持っているわけですが、ここが説教臭くなつたのでは、子どもたちは全然食いついてこない。そこにまさに教育の現場での教えの技術というものが、多分あるのだらうと思います。いかに子どもたちの関心や興味を引きつけて、時としてそれをうまくサポートをしながら、子どもたち自らの力で考えていくという方向にどう導いていくか、そこはぜひ学校の現場の皆さんの努力に期待したいと思っています。

さらに、これも議会で何度か申しあげているのですが、もう1つローカル&グローバル・コミュニケーション教育には非常に重要な意味が隠されていると最近思っています。それはAIの台頭に対する備えです。ロボットは人間の体・腕力に換わるものですので、暑いところでもロボットは代わりにやってくれる。力仕事もロボットがやってくれる。このこと自体をそんなにとがめる人はいないだらうと思います。ですけれども、AIは人間の知能に換わっていきます。これこそが人間の仕事だと思つているところが、実は機械に置き換わっていく。AIに置き換わっていくということが、もうすでに起きています。前にも申しあげたかもしれませんが、すでに病気の診断はかなりのところAIがやっています。その診断結果とか、過去の結果がオンライン化されますと、その全てのことをAIは間違いなく記憶できます。人間はできません。人間は忘れることもありますけれども、AIは忘れません。つまり膨大なデータをきっちり記憶をして、その膨大なデータに基づく推論をやらせたら、人間はもう絶対に勝てない。ですから、過去の判例を頭に入れることができるのは、弁護士よりもAIのほうが必ず優れている。過去の判例も全部頭に入れると、このケースがどういう判断になるかということは、多分弁護士や裁判官よりもうまく出してくる可能性がある。そうすると、知的労働がどんどんどんどんAIに置き換わっていくことになります。例えば40だとか50だとか、もっと60

になって、この道一筋できた。私はもう税務に関してはこれでやってきたのだとか、ひたすら診断のことはこうしてやってきたという人たちが仕事を失ってしまいます。そのときには、単に仕事を失うだけではなくて、自分の存在意義を失ってしまう可能性がある。これが若いうちで、この仕事ないよと言われてたら、そうか、違う仕事に行こうかですむのですけれども、長い間身につけたものがなくなると、単にあなたの仕事は要りませんではなくて、あなたはこの会社に要りません。あなたはこの社会に要りませんということになりかねない。そこへ非常に大きな社会との疎外感が生まれて、そして、その存在意義を確認できなかった人々が大量に出てくることによって、社会が一気に不安化する、流動化する。そういった危険性を持っています。

もちろん、労働力不足であるとか、生産性の向上だとか、人間なら間違えるけれども、AIは間違えないといったことが、人間の社会に役立つことは多分たくさんあると思いますけれども、その反面としての危険性を持っている。ところが他方で、AIがどんなに普及してもなくならないだろうと言われている職業もあります。それは例えば哲学のように抽象的な概念を組み立てる仕事、あるいは、宗教家のようにまさにこれも抽象的な概念ですけれども、そういう組み立てるような仕事、美的センス、それから、共感、交渉、つまり答えは何が正しいかわからないのだけれども、交渉によって決める場合の交渉の技術、そういったものはなくなると言われています。

ですから、今までの大学入試というものは、今は違っているのかもしれませんが、私の頃などは、私立のこのクラスのところに行くには3教科やればいいと、みんな切り捨ててきた。でも、そういった人材は要らなくなる。むしろ残るのは、ちゃんとアートのセンスがあって、共感、つまりあなたの気持ちはよくわかるとあって寄り添っていくような、そういった職業、例えば典型的に言うと、看護師の仕事などは、多分そうだろうと思いますし、介護も現場のその仕事はロボットがするのでしょうかけれども、側にいて、おじいちゃん、おばあちゃんの話聞きながら、「そうだよね、そうだよね」と慰めていくようなことって、人間しかできないとすると、そういったことに対応できる人材を育てなければいけない。

ところで、AIが普及し始めて、一般的に人間の労働がパッとなくなる時期は、いろんな説がありますけれども、2030年と1つは言われています。2030年というのは、今の小学校低学年が大学を卒業して仕事をする頃です。ということは、2030年頃になって対応したのでは、間に合わないということです。今の幼稚園や小学生に対して、2030年、はるか先のことでありますけれども、美的センスであるとか、共感であるとか、交渉するとか、あるいは、どんなに疲れていても相手に対する思いやりを忘れない。そして、理解する能力であるとか、そういったものは今の子どもたちにちゃんと身につけて渡さないと、この子どもたちは困るということになります。

改めて見てみると、このローカル&グローバル・コミュニケーション教育というものは、実はその備えにも十分なるのだらうと思います。コミュニケーションするツールとしての英語を身につける、あるいは、ふるさとのことを具体的な事柄をもって学んでいって、自分たちの誇りにつなげていく。それから、演劇の時間もそうですけれども、これは役が違えばみんな見える真実が違います。殺人犯のことを演じる子どもと、それを追い詰める刑事の役をする人と、殺人犯の母親役をする人というのは、全部見えるものが違う。つまり、物事を相対的に見ることができると考えていくと、この演劇の授業というものもまたAIとの対策から考えると、非

常に大きな意味があるのではないかと思います。

言い出した頃は、こんなことは全く頭にありませんでしたけれども、今考えてみると、結構これはいい線をついていたのではないかと思います。そのためにも、今日はこれまで教育委員会や教育の現場でもって、モデル的にやってきていただいたこと、それが今どんな状況になっているのかを押さえた上で、お互いに知恵を出して、これから先に行ければなと思っています。

もう1個は、ブラックの職場ではないかと言われている、教育文化をどうするかということでもありますので、この辺のリアルな問題についてもお互いに知恵を出していきたいなと思っています。今日はどうぞよろしくお願いします。

(教育次長)

次に、教育委員会を代表しまして、嶋教育長よりごあいさつをお願いします。

(嶋教育長)

皆さん、こんにちは。私にとっては初めての総合教育会議になります。実践現場にいたときには、市長部局と教育委員会がどのように関わっているのか、なかなか見えにくい実態がありました。改めてこの場に臨むにあたって、過去5回あったこの会議録を見てみますと、実はこの会議の前に豊岡市の場合は、市長と教育委員さんと一緒に懇談をして、その中から施策展開をしたものがたくさんある。ですから、それをフォーマルなかたちにしたのが今回のこの会議という、そんな位置づけでスタートをしたことを見ました。

実は、その会議録を見た方が外部におられまして、文科省の初等中等局の方です。それが実態はどうかということを確認に来られました。市長が言うておられる「小さな世界都市」を目指していく。その小さな世界都市を目指してローカルであることについて、その意味、あるいは意義、そして、価値を教育の場でも勉強する。言い換えれば、ローカル&グローバル学習をする。そのことを確認に来られたのですけれども、話をするうちに、本当に市長の目指しておられることと、教育委員会がやろうとしていることは同じだなと、そんな納得をしながら帰っていかれたように私は感触を受けました。そのときに私の中でも確信はあり、今のお話にもありましたけれども、あくまでも地方創生とか人口減少の対策として教育委員会を使うのではなくて、教育委員会、あるいは学校が主体となって、10年後、20年後に子どもたちに備えなければならない力は何なのかということを考えてときに、それを焦点化すると、やはり3つの力が必要だということ。その1つがふるさとであり、コミュニケーションであり、英語であるということ。そんなことも確信しながら、文科省の方と話のやりとりをしていました。

先ほど市長の話にもありましたように、コミュニケーションにつきましては、研究者はこんなふうに言っています。これから10年後、20年後には、公共圏他者と協議をする。私たちは、子どもも私でもそうですけれども、今やっているのは公共ではなくて、親密圏他者とのコミュニケーションでした。最も小さな学校では、本当に親密な、ものを言わなくてもわかるような集団の中でコミュニケーションをしている。それではこれから20年後、全く相手が何を考えているのかわからない、どんな文化的な背景を持った人かわからない人とコミュニケーションをして、一緒に仕事をする場合には、今のコミュニケーション能力ではダメだと、そんなことを言うておられます。そのことも今私たちが進めていこうとしているコミュニケーション教育の神髄であろうかなと確信をしたところです。

そんな3つのローカル&グローバル学習を、私が就任してから足で歩いて学校現場を確かめる中で、最も感触として手応えがあるのは英語教育です。ある学校に行きますと、非常に質の高いALTが来てくれたということで、そのALTは電車通勤をしていますから、もう通学の時から子どもと一緒に、そこでも英語を話す。休み時間でも英語で話す。給食を食べながら英語を話す。掃除をしながら話す。顔を見合わせれば片言の日本語と英語を話す。ですから、子どもたちが休み時間に鬼ごっこをするときに、「最初はグー」と言っていたのが、最近は「rock-paper-scissors」と言って始めると、そんな話も聞いていますし、親にとってはどうなのか。これも家に帰ってから、圧倒的に英語のことを話す低学年が増えてきた。寝るときに「good night」と子どもが言うから、お母さんが「グッド ナイト」と言ったら、「いや、グッドじゃない、good」という話をするとか、それから、校長先生も授業を見にいったときに、本当に先行的に幼稚園でやっているところはもう何十回もやっているから、圧倒的に大人よりよく耳ができて、よく聞き取れていると。そして、いろんな色を自分で選んで、先生が言った色のところに移動するというゲームだったのですが、そのときに先生が「purple」と言った。校長先生は何を言っているかわからないから、隣の子に「何て言っているの」と聞くと、「purple」だと。「あ、パープルか」と言ったら、「違う、purpleだ」と、そんなやりとりがあったと。本当にみるみる英語のヒアリングの力がついていくことを実感しました。それを小学校につなげ、中学校につなげ、豊岡の教育を受けてよかったと実感できるような、そんな教育施策ができればなと思っています。

もう1つは、新たなそういう、みんながいいなと思えるような施策の裏には、しんどさとか、教職員の就労と言いますか、勤務の問題が必ず隣り合わせにあります。私は何校か回った中で、そのことについて学校はかなり意識しているなど。去年、一昨年よりずいぶん意識して、勤務時間の適正について学校でできることはないだろうかという努力をしているのは、すごく感じました。ただ気持ちだけではできない部分もあります。施策をしなければできない、あるいは、お金を入れなければできない部分もあるかもしれませんので、今日のこういう会議の中で豊岡市の教育の充実とか、今言ったような問題解決を図ることができればと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

[日程3 協議事項]

(教育次長)

ありがとうございました。それでは、協議事項に入らせていただきます。内容について補足説明をするために担当部局の職員が出席しておりますので、ご了承ください。あいさつの中で協議事項が話題となっておりますので、早速ですけれども、担当課からそれぞれの取組につきまして説明をさせてもらいたいと思います。

(1) ローカル&グローバル学習の展開について

(教育次長)

まず、ふるさと教育についてお願いします。資料は、こちらNo.1となります。

(こども教育課主幹兼指導主事)

失礼します。ふるさと教育について述べさせていただきたいと思います。

まず最初に、ふるさと教育で育む4つの資質・能力について触れておきたいと思います。ふるさと教育で育む資質・能力は、課題に関する情報や知識を選択し活用する力、協働して課題解決の筋道を見つけ実行する力、学びの成果を描き出し発信する力、自分の周りの「ひと・もの・こと」につながり深く学ぶ力です。これらの4つの資質・能力を育むためには、座学だけではなく、探究的な学習の充実が大切になってきます。

次に、ふるさと教育の先行実施で確認できたことです。それは、次の3つです。1つ目は、体験することや本物に触れることが先ほど述べた探究的な学習の充実に有効であるということ。2つ目は、身近な地元の題材を扱うことが探究的な学習を深めやすくするということ。3つ目が、そういった探究的な学習の充実がふるさとへの愛着や誇りを育むことにつながるということです。そこに参考までに但東中学校の取組を少し載せておりますが、但東中学校の取組では、探究的な学習を充実させるためにはどうすればよいかといった課題の下、生産者の声を直に聞きに行ったり、販売体験をしたことが、より意欲的な修学旅行での豊岡のPR活動へとつながっています。また、その一連の取組を通して、そこに円グラフを載せておりますが、「販売体験を経験してよかったと思いますか、また、あなたは豊岡市民として誇りを持ってましたか」といった質問に対して、豊岡の市民として誇りが持てたという生徒が95%に達したり、また、調べたこと、ふるさとの魅力をもっと他の人に知ってもらいたいといった感想が見られたりしております。

こういった効果を基に全市展開にあたっては、昨年度まず先行実施の効果を基に標準カリキュラムを作成しました。詳しくはその2番、カリキュラム作成上の留意点というところに載せております。具体的に言いますと、現地調査やゲストティーチャーを通して体験すること、本物に触れることをカリキュラムに位置づけました。他にも発表の方法について、各校で工夫できるように例示を示したり、各校のこれまでの取組や身近なものを扱うべく地域特性を生かせるよう、変更や更新ができるカリキュラムとしています。また、全て体験するのは難しいので、その体験を補完するものとしてガイドブックやDVDも作成していただきました。体験にかかるバス代やゲストティーチャーの派遣補助も決定しております。各校においては、バス利用やゲストティーチャー活用の予定を含む学習計画の作成を依頼しております。今後の取組ですが、学校訪問や事例の集積を行うことで各校での学習計画、カリキュラムに基づく確実な実践を意識づけ、実践の実態把握を行っていきます。他にも校長会、ワーキンググループで先ほど述べた事例の集積の内容、また、各校の情報交換の仕方について検討していきます。そうして今後各校のふるさと教育で探究的な学習の充実を高め、4つの資質・能力を育てていくのと同時に、ふるさとに愛着や誇りを持つ子どもの育成を図っていきます。

(教育次長)

続きまして、英語教育、英語遊び保育から、こども育成課からお願いします。

(こども育成課幼児教育保育指導係長)

英語遊び保育について、簡単に説明させていただきます。A3の3ページです。資料の左側ですが、主に英語遊び保育のねらいや内容、そのねらいに位置づけた具体的な手段をここにいくつか簡単に記載させていただきました。まず1番の英語遊び保育授業のねらいです。これを設定するにあたっては、15歳時点での具体的な目標をこども教育課が掲げておられますが、ふる

さとに学び、ふるさとを英語で語る児童・生徒の育成という目標は、こども育成課でも必ず視野に入れておかなければならないと考えています。小学校・中学校、それぞれの発達段階があるのですが、こういったことを視野に含めながら、幼児期はどういうことを大切にするか考えました。やはり幼児期は人間形成を培っていく上でとても大切な時期なので、この時期に英語嫌いを絶対に育てない、そういったことを大事にしたいと考えました。なので幼児期は、黄色い四角で囲ってありますが、英語大好き、もっとしたいというような積極的な気持ちを育む取組、遊びを通して英語を経験する、このことに徹底して共通理解をしていこうと考えました。それをするには、絶対に指導員と保育者との安定した、安心した人間関係、信頼関係の中で培われるものだと考えています。

続いて2番です。それを実現するために手段01・02・03と整理しました。具体的な方法として、手段01です。英語遊びが豊岡の特色ある教育・保育として位置づけられている。手段02、指導員及び保育者が研修会等を通じて指導力を向上させている。03、英語遊び保育にかかる取組内容や授業趣旨がしっかりと理解されている、こういったものを具体的に進めていきたいと考えました。続いて右側です。

3番、巡回訪問指導について簡単に一部抜粋して記載させていただきました。まず(1)ですが、現在、巡回指導を進めておりますが、推進員・指導員、計7名で各園を巡回しています。実施対象の園ですけれども、市内の保育園・幼稚園・こども園、33園の4・5歳児を対象に実施しております。ご存じかと思いますが、一部、このとり、チャイルドハウス、みえの3つの園では、この巡回の訪問はしておりません。

続いて(3)です。子どもたちの様子ですが、先ほど教育長から一部ご紹介がありましたが、一番上の中黒のところ、子どもたちは緊張感がほぐれ、楽しみに変わってきている様子がうかがえる、笑顔が増えてきている、という言葉をいただいています。3つ目の中黒、指導員にも自信を持って「Hello!」と自分からあいさつができています、そういった子どもの様子がうかがえます。一番最後の中黒のところですが、合橋認定こども園の例を挙げております。平成27年度、28年の1月だったのですが、途中入所で園児が1人いました。周りの子どもたちがあまりにもよくできて、みんなすごい、僕わからないと自信がなさそうでした。そういった英語遊びに関して不安な様子を見せていた子がいたのですが、28年度の夏頃には、右の写真のように他の子がよくできすぎていやだった、苦手だったハローソングも大きな声で自信を持って、笑顔で歌えるようになりました。そういった子どもたちの変容を聞いております。以上のようなことから、平成29年7月時点では一部未実施のところがあるものの、概ね予定どおり遂行できていると考えています。

続いて4番、これからの英語遊び保育の授業の進捗イメージですけれども、平成29年度、今年度は普及に重きを置いています。巡回訪問は年15～20回程度を考えて実施しておりまして、続いて平成30年度、この事業をいよいよ発展させていきたいと考えています。巡回訪問の回数は年25～30回程度、単純に今の倍程度行きたいと考えておりまして、週1回程度行きたいと考えています。そして、平成32年の安定的な展開、この事業が当たり前のように展開されている状態にもっていきたいと思っています。最後、現時点での、そして今後の課題です。平成30年度からこの事業をより発展させていくために、4つの課題を考えています。ここに記載してあるとおりですけれども、これらの4つのことに照準を合わせて、この事業を大切にしていきたいと考えています。

(教育次長)

続いてどうぞ。

(こども教育課主幹兼指導主事)

英語教育です。よろしくお願いします。課題としましては、先ほどこども育成課からもありましたように、ふるさとに学び、ふるさとのこと、自分のことを英語で語ることのできる子の実践を目指して、先ほど英語嫌いを作らないというお話がありましたけれども、小中学校でも英語に親しむこと、楽しむことを目指して、昨年度はモデル校として但東中学校区・城崎中学校区で取組を行いました。そこに挙げていますように、授業においてですとか、休み時間等、ALTを活用しながら、授業ではアクティビティですとか、ペアやグループワークなどを取り入れた授業を行うことで、子どもたち1人ひとりができるだけ英語に親しみ、英語を聞いたり話したり経験することを増やす中で授業づくりを行ってきました。また、今年度から活用するカリキュラムシートを、一昨年度から作成にあたられましたけれども、実際にモデル校区の教諭が実践して、改善点を見つけながら修正を行い、より効果的なものを作り上げられるように修正を行ってきました。また、実際に今年度から全市展開ということで、どのように授業を行っていけばよいのか英語教育推進委員が授業を公開して、授業についてモデル提示を行ってきました。そうした中で、取組の成果としましては、そこに挙げておりますように、やはり英語を表現する機会が増えてきた。家庭であるとか、学校の行事、そこに写真を載せていて、真ん中3つ並んでおります一番右の写真は、学習発表会などで英語劇に取り組んだときの写真です。こういったところで、学校行事であるとか、学級活動であるとか、そういった場で子どもたちが英語を話す機会、英語を表現する機会が増えてきました。同時に、英語の授業、英語遊びの時間を楽しむ子どもたち、楽しみに待つ子どもたちが増えてきました。また、まち中におられる外国人に声をかけたり、修学旅行に出向いたときに外国人に出会ったら自分たちから進んで声をかけることも増えてきました。教師もだんだんと自分自身が英語を使うこと、また、授業を行っていくことについても意識の変容が見られてきていることが成果として挙げられるのではないかと考えています。

課題として挙げられますのは、よりALTと出会う時間を確保することや、継続させていくこと、授業において担任や教師がALTをどのように活用していくのか、それぞれ担任の授業力でありますとか、配置されているALTの授業力とか指導力の差、また、英語遊び保育とのつながりでありますとか、そういった面で子どもたちが英語嫌いにならないように、うまく接続できるように、そういうことが課題となっています。

その課題の解決に向けて、やはり役割分担、打ち合わせをした上で、ALTを最大限に活用してネイティブな発音に触れたりとか、外国の文化に触れたりとか、そういったところを生かしながら授業を行っていく工夫をしていくこと、また、授業だけではなくて、先ほど教育長からもありましたように、休み時間であるとか給食の時間など、ALTもしくは英語と出会う時間を設定していく、また、英語に触れるということで、イングリッシュボードでありますとか、英語の音楽を流すような取組をしているところです。また、まだまだ教師の側の授業力を向上させていくことも必要だと思いますので、研修を充実させていくということを今がんばっているところです。また、英語教育推進委員会を立ち上げており、校長会でもワーキンググループで現在取組について議論しております。

(教育次長)

ではコミュニケーション教育。

(こども教育課主幹兼教育研修センター所長)

コミュニケーション教育につきまして説明をさせていただきます。コミュニケーション教育につきましては、現在2つの柱で取組を進めております。これまでからもお伝えしているとおり、1つは小学校6年生と中学校1年生で行う演劇的な手法を取り入れた授業です。もう1点が小学校1年生から中学校3年生までのコミュニケーション能力を高めるために、その視点として大事なことを整理したものを一覧表として作り、各学校で取組を進めております。

1つ目の柱。演劇的手法を取り入れた授業を中心にして、モデル校における実績をお話しさせていただきます。演劇的手法を取り入れた授業のねらいは、四角囲みの中にありますように、体験的な活動等をしながら合意形成を図ること、それから、協働性を育むこと、多様性への理解を深めること、この3点と考えております。5校をモデル校に指定しておりましたが、その中には2つの役割がありました。1つ目は、平田オリザ先生を始め、プロ講師による授業を公開して、実践事例を集めながらプログラムを確定するということです。6つのプログラムを確定しております。そして、その確定しましたプログラムにつきましては、学習指導案とワークシート、また、プロ講師による授業を納めたDVDをセットにして各校に配付しております。2点目は、そういったプロ講師による授業を市内の先生方に参加していただく機会を複数回設定して目撃者を増やすという取組を進めてきました。昨年度は授業を見られた市内の先生の中から、校内で自分でも授業をしてみようと挑戦をされる方も現れてきております。

次にコミュニケーション教育における効果です。平田先生がおっしゃるには、「演劇的手法やコミュニケーション教育というものは一朝一夕に即効性があるものではない。また、併せて演劇が果たす役割として、合意形成能力や協働性、多様性への理解を高めること、こういった可能性は大いにある。」とおっしゃっております。モデル校で公開された授業の中で、合意形成、協働性、多様性への理解に関わることで、子どもたちの姿が見られたことをいくつか紹介したいと思います。

1つ目は、考えを擦り合わせながら合意形成を図るという姿です。小学校6年生の教材に「転校生がやってきた」という対話劇があります。劇をするにあたり、役割分担をまずしなくてはいけない。そして、場面を設定するにあたって、その転校生がどこから来たことにするのか、そして、どんな名前にするのかといった簡単な課題があります。そういったことを解決するために、子どもたちは1つずつ友だちと声を聞きながら、そして自分の意見を伝えながら解決をしていくという作業を積み重ねていきます。そうした中で考えを擦り合わせながら、なんとか合意形成を図る。ただこれは限られた時間の中でございます。時間内に間に合わないことはあります。その場合はジャンケンで決めたりすることもあるのですが、逆にそれは合意形成をすることの難しさ、これを体験しているのではないかなと捉えています。

2つ目に、協働して課題を解決するということです。小学校6年生、中学校1年生になりますと、やはり男女ということをお互い意識する年代でもあります。そうした懸念が多少ありました。ただ、活動を進めていくうちに、どんどんその壁が低くなって、最終的には課題を解決するための仲間として頭を突き合わせながら活動する姿が見られました。やはりこういったものがプログラムの魅力であったり、この演劇的手法を取り入れた授業の魅力ではないかなと考

えています。

3 つ目が、多様性への理解を深める姿です。このプログラムには正解というものがありません。自分たちでよいと思われるものを創り上げていくというよさがあります。私が見た授業の中に、特別支援学級のお子さんが入っておられる授業がありました。私はそのお子さんがどの方か最後までわからなくて、最後になってから校長先生にお伺いしました。子どもたちはその子にもしっかりと役割を与えている。それは他の子と同じ役割ではなくて、その子に合った、台詞は言わなくてもいいという役割を与えていました。それが子どもたちの中でできているというところに、すごく魅力が感じられるのではないかなと。

4 つ目に、これはすべてのことにつながるのですが、全て教師が言葉で伝える、教えるのではなくて、体験をすることによって子どもたちが自ら学びとっていく、そういったプログラムではないか、そういった効果があるのではないかなと考えています。

最後に、全市展開に向けた取組の留意点ですが、1 つは担任がそれぞれの活動のことを理解しながら、授業力を向上させていく。昨年までは見るだけでした。実際にやってみると、やはり難しさを感じている担任もいます。そうした中で、今年からモデル校で担任の指導による授業を公開しているのですが、その後に意見交流会というものを設けております。そこにも平田先生に入っていて、担任が不安に思っていることについてアドバイスをいただく機会を設けております。

2 つ目に、他教科への学びの広がりです。これはコミュニケーション教育における 2 本の柱の 1 つとして、「目指すコミュニケーション能力の視点の留意点一覧表」これを活用した授業をしていかないといけない。小 6、中 1 だけではなくて、小 1 から段階的に指導をしていく必要があるかと思えます。その視点としては、他者を理解することであったり、自己を見つめ直すことであったり、他者と協働して活動することであったり、正解のない課題に取り組むこと、こういったことを日々の教科の授業の中にも取り入れながら、授業改善に取り組んでいく必要があるかと思えます。

(教育次長)

担当課からの説明は以上ですけれども、教育委員の皆さん方も、この各取組につきまして、実際現場を見ていただいております。何か現場を見て、子どもたちの様子など、感想がございましたらお話しいただきたいと思えます。

(中川委員)

3 つの教育については見させてもらいました。市長も英語遊び保育を実際に見てもらって、ALT の配置とか、ずいぶんご理解いただいたと思っています。僕も一昨日コミュニケーション教育を初めて見させてもらいました。初めてというのは、今まで平田先生の授業を 2、3 回見させてもらって、今回は現場の担当の先生がやるということで、どんな感じかなと初めて見させてもらいました。結論的に言うと、相当勉強されていまして、上手にできたなということが第一印象です。事前の準備も大変なのだろうけれども、やはり準備だけではなく、その時々での対応とかもあったりして、本当に初めてにしては、うまくできたなど。そのときは我々委員と、それから、他校で担任の先生で担当する人も 6、7 人ぐらいおられましたけれど、やはり非常に不安を持ってみられたと思えます。平田さんは昨日おられましたけれども、授業の中では

一切口を出さずに、終わった後で現場の先生とかについてコメントを出しておられた。3 時間ありましたが、1 時間目の授業なんかはほぼ完璧だったと、そこまでおっしゃっていたので、現場の先生は不安を持っておられたと思いますが、平田先生の指導もあるのだし、同じ指導する担任の先生もおられるのだから、思い切ってやったらいいのでは。そんなに1 回目から完璧な授業などではできないのだけれど、そこはもう修正するなりして、あまり不安を持たないようにやってほしいと言いました。また、授業の中では、所長が言われたように、特別に支援を要する子は全くわからなかった。これは順調にスタートしているなどと思いました。

それから、ふるさと教育について、但中のことはご存知ですよ。あそこは本当にうまくやって、子どもたちも3 年生が最初にやって、彼らが終わってから下級生を対象に、ビデオもそうだし、自分たちがやってきた取組を教える。下級生は先輩のを見ていますから、早めに準備をしていく。来年は僕たちだなど、心構えもできたのではないかな。そういう面でもよかったし、前回言ったかもわかりませんが、最初に参加した子の中には不登校の子もいたようですが、それを機に自分も皆と一緒にできるという手応えを感じるものがあったのでしょうか。それから学校に来るようになったということで、なかなか表に出てこない点でもすごい効果があったなどと思っています。

それで、今日は市長にぜひお願いしたいのは、この3 つの教育、いずれもそうですが、特にコミュニケーション教育については小規模校とか、とりわけ複式学級の子どもたちにとっては、これをやろうとすると非常にハードルが高いなどと思いました。昨日も現場の教師の中から、実は小規模校なのだけれどもどうなのだろうと平田先生に質問をされていました。それはやり方はいろいろあって、例えば2 学年でやるとか、小学校、中学校で一緒にやるとか、あるいは同じような小規模校の他校と合同でやるとか、手はありますよと平田先生がおっしゃっていたのですが、僕はやはりそれは限度があるなどと思っています。昨日は1 班でだいたい6 名ぐらいで、先日行ったところは、それが5 班ぐらいあって、班の中でいろいろ相談することはできると思う。授業の最後には班ごとに発表していくわけです。そうしたときに多様性ということで見ると、小規模校で仮に合同でやったとしても、せいぜい1 つなんです。その班の中ではいろんな考え方が出るかもわからないけれども、多様性という部分では、やはり弱いのではないかと考えられるので、市長にはぜひ小規模校の中でも複式学級、授業をどういう状況で行っているのか、忙しいかと思いますが、一度ぜひ参加してほしいなどと思います。現場の先生も大変なんです。複式では2 学年持つわけですから、前日の勉強も倍かかる訳ですね。そして当日の、片方では授業をしながら次は別の学年でしょう。それも学年がほぼ同数だったらいいのだけれども、先日行ったところなどは、2 人のところと4、5 人のところがあったりして、やはり時間のバランスもあるのだろうし。かわるときには一方のグループに声をかけて、こういうことをどうだと指示して他の学年に変わるわけですから。子どもというのはやはり先生が質問してわかったら、本当はすぐ「先生」って座って手を挙げますからね。ところがそれがなかなかできずに、ちょっと時間が空いてしまうことがあります。複式学級はあまりにも問題が多すぎるなどという考えを持っているので、ぜひそのことをお願いしたいと思います。

(深田委員)

全体的な意見については後で話をすることにして、今、次長が言われた感想ということで話をさせていただきたいと思います。

まず英語教育ですけれども、英語教育については英語遊び保育について何箇所か見に行きました。そのときに感じたのは、全体的に今発表されたとおりに大変スムーズにいていると思います。子どもたちは、言われたとおりにすごく生き生きとしていました。僕も小さいときからこのようにしてもらっていたら、今のように英語が苦ではなかったのと思うぐらい、すごくよかったです。また、発達に特性のある子への対応について、見に行った園では介助の保育士の先生がその子に付き添い、参加できる場面で参加させ、そしてちょっと参加できないところでは少し場を離れ、という対応をされており、そうすることでALTの先生方もプログラム全体を大変スムーズに進められていたと感じました。子どもたちみんなが楽しく英語遊びを体験し、英語大好きに育てようとするためには、そういうきめ細かな支援というものが大切なことだと感じました。

あとコミュニケーション教育につきましては、私たちも一緒に参加させていただきました。中川委員とはまた違う観点で話をするかもしれませんが、その中で1つ感じたのは、コミュニケーション教育というものは、教科横断型の教育なのだと、つまりいろいろなことを子どもたちはこの中にギュッと盛り込みながら作っていく授業であると感じました。これこそがまさにアクティブラーニングの1つの典型かなと感じました。それだけに先生方の準備たるものは大変だなと感じました。あと、あの中で1箇所、6班あったと思いますが、その班の中で1つの班がシナリオを書くのにちょっと時間がかかって、遅れたところがある。それは、脚本の中に受けをねらい、子どもたちが盛り上がりを作ろうと先生がしゃべる台本の話の話をちょっと大きくしようとして、少し行き過ぎたところがあって、それが人を傷つける言葉になっていないかということを先生に指摘されて、それをやり直したのでちょっと時間がかかった班がありました。そういうことを考えたら、子どもたちというのはすごく素直ですから、思ったことをそのままズバッと出してしまっても、それを指導する立場の人はきちんとした価値観を持って指導しなければ、それが一人歩きしてしまう。そのことをしっかりとこの先生は押さえておられたなど、それにすごく私は感動した、もう安心だなと感じました。感想で言いますとそのようなところです。

(佐伯委員)

ふるさと教育を一昨日一緒に見させていただきまして、去年も同じ学校で見させていただいたのですが、去年は平田オリザ先生のお弟子さんの授業でした。そこでふるさと教育を入れながらの授業だったと思うので、豊岡というものについて演劇をするという授業でした。コミュニケーション能力をつけるという意味で、いろんなふるさとのカテゴリーも絡めながらで、すごくいい授業だなと見させていただきました。今年も担任の先生がされる授業でした。担任の先生の準備とか、ご苦労はすごくたくさんあるのだろうなと思いましたが、それをきっちりやってらっしゃったので、とてもスムーズに授業が運んでいましたし、子どもたちも多くの意見を交わしていましたので、すごくいい授業だったと思います。

英語遊び保育の英語教育ですけれども、先日豊岡めぐみ幼稚園で見させていただきました。幼稚園児なんですけれども、先生のネイティブな滑らかな発音を聞き取っていて、教育長のお話ではないですが、私はちょっと聞き取れないところがありました。子どもたちはすぐに反応していたのですごいなと、子どもたちの耳のよさというのは、すごくいいのだなと思いました。

この英語遊び保育は、今年度は年間15回ぐらいで、来年度からこれが倍ぐらいになるという

報告をいただいています。小学校 1、2 年生では年間 10 時間で組まれています。10 時間だから休み時間とか給食の時間とか、ALT の先生と触れ合う時間を補うとお聞きしています。せっかく幼稚園で英語大好きで、発音もいっぱい聞き取れる力がついています。ところが小学校に入ってからちょっと時間が少なくなります。ALT の先生の人数に限りがあると思いますが、もう少し ALT の先生を増やしていただいて、せっかく英語が大好きだという気持ちになっているのですから、子どもたちが小学校に上がっても引き続きその気持ちがずっと維持していけるような状態を作っていただけたらなと思います。

(向井委員)

私は英語教育の英語遊び保育とコミュニケーション教育の授業を皆さんとご一緒に一度ずつしか拝見していないのですが、英語遊び保育に関しましては本当に素晴らしい指導員の方で、動きがあったり静かになったり、躍って体を動かしたと思ったら絵本を聞いて静かな時間になって、その組み立てが素晴らしいなと思いましたし、担任の先生とのコミュニケーションとか信頼が感じられ、4 回目の授業だったかと思いますが、先生と指導員の方の連携がすごくうまくいっているなと思って感心しました。

この間のコミュニケーション教育では、あんなに 6 年生って落ち着いて集中して先生の話が聞けるのかな、どこの学校もそうなのかなと思いました。豊岡小学校だったのですが、平田先生も学級運営がすごくうまくいっているクラスだと思いますとおっしゃっていました。話を聞くときの集中力がすごいなと思いました。その辺は感心しました。グループで討論をするときには活発な意見が出て、それもみんなが意見が出し合えて、そういうところもすごいなと思いました。先生の指導で子どもたちの意見を最大限に引き出すというのか、先生が子どもたちの意見を待ってやる場所、そういう先生の力にとっても感心しました。最後に見ておられた先生の意見交換のときに、中川委員がおっしゃったように、6 年生が 4 人しかいないですねと言ったら、グループが作れないのが悩みの種でとおっしゃって、小小連携して違う学校と組んでやるのが課題かなと思いました。とてもいい授業を見せていただきました。

(中川委員)

参加者が、他校と一緒にやろうと思っても、どうしても移動の問題がありますとおっしゃっていました。

(向井委員)

あれだけの人数がいて、授業が成り立つのですよね。

(中川委員)

ちなみに昨日教えていた先生は 30 歳ぐらいの女性の先生でした。なかなかすごかった。

(嶋教育長)

英語教育の情報提供をし忘れたのですけれども、実は小学校 1、2 年生が年間 10 時間です。さっき佐伯委員さんからあったように、幼稚園で培ったノウハウを 10 時間でいいのかという問題はずっと頭の片隅にあるのですけれども、でもそれ以上は、今ちょっと取れないような状

況です。そういう意欲のある子たちにもう少し英語の場を提供しようということで、夏休みにサマースクールを各地区でALTを使ってやります。半日ぐらいで。募集をしたら、なんと215人、1年生総数の3分の1が希望している。この数字をどう読むのだと指導主事と話していたのですが、1つは、子どもが英語が楽しい、好きだと言わなかったらお母さんは押し出さないわけですから、そのことが一番だろうと思います。もう1つは、家でもそんなふうに会話ができているので、英語ってこんなんだということがあるから、それじゃあせつかく英語をやるのだからと、そういうことで押し出してくれる。こういう意味では、子どもにとっても親にとってもまずまず成功かなと思います。

ただ、今小学校のいい面、あるいは、幼稚園のいい面ばかり言っているのだけれども、去年・今年と久々に中学校の英語を見てきたときに、小学校でこれだけコミュニカティブにやっているのに、昭和の授業とあまり変わらないような、文法を黒板に書いて、新出単語をやって、パターンプラクティスで英語を読んどやってる。何かすごく生かされてなくて、9年間の出口には自分の言葉で自分のふるさとを語ろう、自分のことを語ろうと言っているときに、もうちょっと中学校は勉強させないといけないかなと、私自身の問題意識が出たので、これは今年宿題としながら、そういう視点で学校を回ろうかなと今思っています。

(中貝市長)

かなり断片的なのでしょうけれども、言われた中で非常に可能性を感じてられることがよくわかりました。それで、もう1つ、あと実証性ということをずっとお願いしているのですが、このローカル&グローバル・コミュニケーション教育が始まって、いったいどこが変わっているのか、その辺を実証的にどう捉えるかということをや。行って見て印象としてよかったねと言って、今年はよかったねということではなくて、何がどう変わっていつているのかというところをどんなふうを示されていくのか、それ自体が課題だろうと思います。

それが1つと、もう1つは、今、教育委員の皆さんは現場を見られて「へえ、これ面白いな」とおっしゃっていたわけですが、ほとんどの人は知らないわけですね。保護者も、議員も。僕もたまたま竹野の認定こども園に見に行ったから、なるほど英語遊び保育はこんなのかとイメージを持ったのですが、大半の人は持っていないわけです。それで、できるだけ現場を見てもらうのはいいのですけれども、とはいっても限りがあるので、だとするとどういうふうに伝えるのか。手っ取り早いのは、映像を撮ってしまうのが手っ取り早いと思うのですけれども、まずは一番の利害関係者で関心を持っている保護者の皆さんに、実はこういうことをやっていることを知ってもらうのがいいのではないかと思います。それから、あとは議員の皆さんとか、できるだけ近い人たちにまず見てもらう。そうすると、これは俺たちの学校は大したことをやっていると思うと、学校に対する態度が変わってくるので、一方的に自分たちはサービスの受け手なので、サービスでちょっと問題があると文句をガーンと言ってくるという、そういうことではなくて、信頼関係を作るのにきっかけになると思うのです。実証性のこととも関係があるのですけれども、意識してそういうものは映像に撮るなり、あるいはさっきの小規模校のときの班編成で班が1班しかできないとすると、当面やりくりするとなると、複数の学校でやるほかはないので、それなら何か発表会をやってみるとかいうこともいるのでしょうけれども、そのときに地域の人たちに見てもらおうとか、絶えず今こんなトライヤルをしていることをいろんな人たちに実際理解してもらおうということを併せてやるのがいるかなと思います。

それから、小規模校の問題、当面、そうはいつでも小規模校なので、これはこれから人口がバツと増えてきて、子どもの数が増えることはあり得ないので、当面はやりくりするしかないわけです。やりくりしか。だけれどかねてから課題になっているように、一体今の規模でいいのか、そこは正直どちらかというところ、先延ばしにしていたわけですね。常に地域の皆さんの学校は大切だという思いとぶつかっちゃって、ここを根本的に変えないことには、この小規模校の問題はやりくりだけでは本当に解決できないです。そのためにもやっぱり知ってもらうことがいるのだらうと思います。頭の中で小規模校だからむしろ濃密な授業があつてとか、複式学級だつたっていろんな動きができますなどと言うのだけれども、そんなことではないでしょう。現場を知らないから言えることが多分あると思う。そういう意味でも、それぞれの今の小規模校におけるこういったものを見てもらうことは、やっぱりいるんじゃないかなという気がします。

いずれにしても、このローカル&グローバル・コミュニケーション教育は、いろんな可能性を秘めている取組だという気がします。

(嶋教育長)

今の件で、まず実証性の件につきましては、教育現場は2つあるといつも言っているのですが、1つは私たちがさっき述べたように、定性的な評価、直感であるとか、子どもの発言であるとか、もう1つは数値として、できるだけ見える化をしていく。そのためには何を基準にして、どんな数値をとったらいのかということ佐藤真先生が研究をされていますので、いわゆる評価方法ですけども、それを勉強しながらやっていきたいなと思っています。パフォーマンス評価と言われるものですけど。

2つ目の知ってもらうということですが、先だつての校舎長会でも当初に言ったのですけれど、全ての学校でオープンスクールがあります。できるだけそれを案内して、特に英語であるとかコミュニケーションであるとかいうことは、オープンにしましょう。さっき僕が言った、保護者の感想というのは実は地区懇談会で出てきた言葉を拾ったのですが、地区懇談会でもアピールして行って、こんなときにこんなことをしますから、ぜひとも来てくださいと、それはぜひとも強気に進めようかなと思っています。

それから、小小連携。適正規模でコミュニケーションをしなければなかなか効果が上がらないということは僕も思っていて、竹野地区は3校が一緒になって1つの学校に集まって、その日にコミュニケーションと英語をやっていますから、それも1つの方法です。3校でやったらこんなことができるけれども、通常のうちの学校のオープンスクールでは、こんなことはできないかなと認識してもらいたいいいチャンスかなと思いますので、できる限り今の可能性でそんなことをしていきたいなと思います。

(深田委員)

先ほど言いましたように、ローカル&グローバル学習全体についての私が思っていることについて、お聞き願えたらと思います。一番最初のあいさつの中で市長がおっしゃいましたように、人口減少社会の中で追い詰められていった地域にとって、学校というものは最後の砦だというような考え方をする人がいらっしゃるのも事実です。ただし、今、市長がおっしゃったように、それはそれとして、子どもを中心に考えていかなければならないという考えは、僕

もこれが一番大事だと思っています。将来ここを担っていく、ここだけでない社会を担っていく子どもたちに何を伝えて何をしっかりと受け継いでいってほしいのかイメージしなければならぬのは、私たちの使命だと思っています。そういう意味ではこの3つの柱を中心とした、ローカル&グローバル学習というものは、本市にとっての大切な教育概念です。行き詰まりを感じてきた地域にとって、それをどう解決していくかという手段として小小連携もやってきましたし、その小小連携を受けて小中一貫教育へ変わっていく、その中の柱としてのローカル&グローバルですので、そういう意味ではローカル&グローバル教育は、私はしっかりと大きな成果を生み出す兆しを残してきていると感じておりますし、これがしっかりと子どもたちを育てていく方法として、絶対間違いないと思っています。

ただ課題として感じるのは、1つは次の段階として、やはり起業家精神というか、そういう育成というような、キャリア教育の視点をしっかりと入れて、9年間のカリキュラムを管理していかなければならないと感じております。そうすることによって、多分これから大きな課題となっていくのだらうと思えますけれども、コミュニティ・スクールへの道というものが開かれていくような気がします。そうすることによって、保護者を始め地域の方々が学校へしっかりと参加して、そして学校に参画していくという意識づけにもつながっていくのだらうと思えます。ただ今言われたように、私たちを含め教育委員会がそれをしっかりと情報発信しているかと言われたら、多分課題かなと思います。しっかりとしたDVDを作って渡しているのだけれど、それを地域の中でちゃんと観たりする機会があるのかと言われたら、先生方は観ておられるけれども、地域ではない。というようなところが感じられたりするの事実です。

あとは、ひとつひとつについて言う時間はあまりありませんので、総括的なことを言うことになりすけれども、1つは異文化理解についての体験的な理解をしっかりとさせる、そういう仕掛けを作っていかなければならないと思えます。英語教育は英語教育で1つのツールであります、その根本にないといけないのは、子どもたちが英語を通じて異文化をどう理解して、どれだけ協働性と、それと同時に多様性への理解をしていくかということが狙いであり、ここで説明されていたとおりですが、そういうものについての仕掛けも必要になってくる。それと同時にコミュニケーション教育ということになれば、ここに最初にあったように合意形成だとか、協働性、多様性への理解とかいうことになれば、やはり体験的にどうそういうものを学ばせるかということになれば、ある程度の規模というものも必要になってくることは先生方の意見交換の中での不安の中でもかなり出ていましたので、その辺のところをどうやって支援していき、そういうものをきちっと確保していくかということが教育委員会の大きな課題だなと感じております。

全体としては小小連携、そして小中一貫教育に流れてきた豊岡の教育の中身の肉付けをこれから問われていく、そういう時期に来ているのだらうと思えます。これをしっかりと教育委員会サイド、そして市長部局サイドから地域の方々に理解していただく。不安を持たれている方もたくさんいらっしゃると思います。地域でも若い世代、就学前の子ども保護者の方はいろいろと小規模校に対する不安を感じておられていますし、また、そういうことに対してのケアも私たちがまだまだできていない部分だと思います。片や小規模校に入っておられる保護者の方は、市長がおっしゃったように手厚いケアをしていただいで、ここからできるのだという考え方をお持ちの方もいらっしゃるの事実です。その辺の課題を明確にしながら、ひとつひとつ解決を図って、本来の方向性に持っていくということも、これからの一番の大き

な課題かなと思います。

(2) 学校現場における業務の適正化について

(教育次長)

続きまして、学校現場における業務の適正化につきまして、説明をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

(こども教育課長)

学校現場の業務改善、勤務時間の適正化につきましては、本当に大きな課題であると認識しております。今年度の4月当初から校園長会や校長先生方の面談、学校訪問などの機会を捉えて、実態把握であったり、取組の推進についての指導や依頼をしているところです。資料2に基づいて説明をさせていただきます。

学校現場の業務の適正化ですけれども、1番は県の勤務実態調査が昨年度、28年度に行われました。抽出調査でしたので、全体の13%の教職員が該当しています。豊岡市では小学校2校、中学校1校が対象となっています。その中で地区ごとの比較がありましたので、そこから拾いますと、黄色に塗ってある部分ですけれども、残業時間、但馬は小学校2時間34分、中学校が3時間24分と、県下他地区よりも長い状況が見られました。

それから、大きな2番に飛びますけれども、その県の勤務実態調査から豊岡市の対象校であるA小学校、B中学校とそこには書かせていただいておりますけれども、どちらもそこその規模のある学校です。その個人の調査用紙をもう一度拾い上げてみましたら、平日の残業時間がA小学校では月曜日から金曜日まで、合計が17時間1分で、1日平均3時間24分、B中学校では18時間10分で1日平均3時間38分、この両方、小学校、中学校ともかなり残業している状況が浮かび上がってきました。職種別に言うと、やはり教頭先生が、週合計22時間30分と一番長かったです。その下の円グラフは、残業時間の中で行った業務の割合を円グラフに表してみました。小学校ではオレンジ色の成績処理のところが42%と一番多くなっており、2番目が水色の授業準備、中学校では茶色の部活動が27%と一番長く、2番目が水色の授業準備が22%と、これは調査時期が小学校がちょうど7月の1週目から2週目で、学期末の成績を出す時の調査だったので、成績処理が長かったのかなということもうかがえるわけですが、中学校はやはり部活動が占める割合が長いということがそこからわかりました。

裏面に移ります。3番目はこれも県の調査から拾い上げました。校務の効率化のための情報環境の整備状況で、各地区の校務の情報化について調べたデータです。この中で但馬地区、太線で囲みましたが、他地区と比較してみますと一番右端の校務支援システムの導入、ここの数値が他地区に比べて非常に低いことがわかりました。それぞれ出席統計であるとか、通知表や指導要領など単独システムをコンピューターで処理するシステムは、それぞれ導入しているわけですが、総合的に管理する校務支援システムの導入が但馬地区は県下と比べて非常に遅れていることがわかりました。

4番目は市の業務改善に対する取組状況で、①から⑩まで挙げております。①から⑤までは、今年度特にここを各学校で工夫して取り組んでくださいと4月当初からお願いしております。⑨の夏休みの学校閉庁日、これは今年度から新しくできました。⑩の市による人員配置では、今年度ALTの小中学校全校配置、登校指導対策補助教員の2名増員、介助員、スクールアシ

スタントも3名増員していただきました。スクールソーシャルワーカーも今年度から中学校4校で配置しました。本当にここは手厚くやっていただいて、今年度改善した部分です。

最後5番目、業務改善に係る課題と対応策について、簡単にまとめてみました。2つ、(1)の業務、業務量と、(2)人的配置と分けておりますけれども、乱暴な考え方をすると仕事を減らすか人を増やすかという話になってくるのかな、ということで2つに分けてみました。1番の業務ですけれども、やはり新たな課題共有、いろんな教育、当然小中一貫教育で新しい取組をお願いしているわけですけれども、そういった対応がどんどん入っていったので、現場としては業務が非常に増えているという多忙感があります。それから、従来なら行っているものをなかなか廃止をしたりするのは難しい部分があります。そこで対応としては、やはり先ほどの情報環境の調査から分かった部分ですけれども、効率化・情報化をさらに図っていく必要があるのかなと思います。そこで、校務支援システムの導入に向けた調査研究を始める必要があると認識しております。効率化だけではなかなか追いつかない部分がありますので、やはり現在行っている事業であったり、学校行事であったり、研修等の意義も本当に確認しながら精選を進める必要があろうかと思えます。

2番の人的配置ですけれども、課題としましては中学校現場では部活動が非常に負担感が大きいです。それから、外部指導者等の人材確保が難しい部分があります。そこで、対応のところに記載していますが「運動部活動活性化推進事業」、県の補助事業、2分の1の限られた補助しかありませんが、これを何とか活用できないかと人材確保を進めているところです。その下に「部活動指導員」と記載しておりますけれども、今年度4月に学校教育法施行規則が改正されまして、部活動指導員が制度化されました。外部指導者ではなくて、外部の人材が、校長の命を受けて顧問ができる。単独で指導したり引率ができるよう法整備が今進められております。ただ任用にあたっては、当然県や市の規則の改正であったり、予算化が必要になってきますので、このあたりは今後議論が進められるところだと思います。国でも新聞等に先日出ておりましたけれども、学校における働き方改革ということで、文科省から6月22日に中央教育審議会に諮問されています。この業務改善、勤務時間の適正化について、今年末、12月ぐらいを目標にして何らかの方向性を出されると聞いております。そういった議論も進んでおりますが、教育委員会としても研究を重ねていかないといけないと思っております。

(教育次長)

説明は以上ですけれども、市長から何かありましたら。

(中貝市長)

校務支援システムというものは、どんなイメージですか。グループウェアで動かす要するにソフトウェアのこと。

(こども教育課長)

3番の四角で困んであるところに書かせていただいているのですが、名簿管理、出欠の管理、成績、通知表、指導要録、それから時間割、中にはこの日のこの時間にこの教室を誰が使っているか、そんなところまで組み込まれるらしいです。あと保健関係の情報とかが全て一括総合管理できて、それプラス、グループウェア機能で、メールのやりとり、掲示板、回覧板、スケ

ジュール管理も全て、いろんな機能、どれを入れるかによって値段も非常に変わってくるらしいですけども、そういった総合的なシステムが但馬ではほとんど入っていない。

(中貝市長)

豊岡に入れたらいくらかかるのか。

(教育次長)

導入しているところにいろいろと聞いてみて、どのレベルまでやるのかによって、ということがあると思いますので。

(中貝市長)

人間の行動パターン自体をそっちに合わせないといけないので、どういう方法がいいのかということは、研究がいるのだろうけれどね。それで実際に労働時間が削減できるのであれば、さっさと研究したらいい。それから、一応調査ができているわけよね。例えば、授業準備で22、23%あると。これはトータルの数字ですよ。例えば教員たちの実際1日の行動を追いかけていって、どの時間帯にどの仕事、どんなことをやっているか、そういう分析ができていない。

(こども教育課長)

この県の勤務実態調査は本当にもう1日のスケジュールを30分単位で細かく記録をつけて、全員の先生がやっている調査で、それを見たら全てわかるんですけど。

(中貝市長)

そういうことの調査をやって、それに対する対策というものは県教委は打ち出していない。あるいは文科省は。

(こども教育課長)

その調査を基に県教委では、今年度新たな勤務時間適正化の推進プランと、効果のあった実践事例集を出されていまして、この中からできることを1つでも2つでも取り組んでほしいということで、今年度これをやってきました。

(中貝市長)

学校の現場を知っていないと、なかなか対策ってできないだろうけれども、例えばリクルートが城崎温泉の旅館の調査をしてみた。つい最近、いくつかのところで。それで従業員A、従業員B、従業員Cがどういう動きを1日やっているかを調べた。その結果、ここに無駄があるとか、ここは協働できるとかいうて、要するに労働時間をどう減らせるかとか。それから、改めてわかったのだけれども、あの世界では「たすきがけ」と言うらしいのだけれど、午後とか夕方にお客さんを迎えた従業員が「いらっしゃいませ」と言って晩ごはんを部屋に持って行って、それから今度は「お布団を敷かせていただきます」と言って布団を敷いて、「明日は何時にお食事ですか」と聞いて、次の日に朝「おはようございます」と言って、料理を出して布団を上げる。これを、何の根拠もないのだけれど、同じ人間がしないといけないと頑なに信じてい

たわけです。昨日知った人が朝来たら「おはようございます」と言うほうがいいかもしれない。その結果、1人の人間が朝早くから夜遅くまで働くことになって、昼間スカッと空いている。全く空いているわけでもないけれども。それをなにも1人でやらなければいけないという根拠はどこにもない。とすると、例えば朝の部分だけパートタイムに出してしまえば、もっとリーズナブルな労働時間の体系ができるのではないかということが今わかってきて、いくつかの旅館で実際にそれをやろうとしている。そうしないともう従業員の確保ができない。今従業員さえいればいくらでもお客さんが来るのだけれど、従業員がいないので断っている。ところが日本中で人手不足なので、しかも大企業が今ものすごく人を採る意欲があって、福利厚生といったら勝てっこないよね。給料も勝てっこない。そういう中で選ばれる職場になるためにどうすべきかを今城崎は必死になってやろうとしている。それは意外と他の目で見るとわかること。こういうデータがあったとして、実際学校現場を考えても意味がわからないので、城崎温泉の旅館のようには多分いかないと思うのだけれど、本当は県教委のあたりはもっとプロフェッショナルに、そここのところを検討してもらって、どこをどう改善すればいいのかということ突き止めないといけないと思う。片方で言うことは言うておくけれども、うちはうちでどうするかだよ。

(深田委員)

まず学校文化というものがあると思います。言われたとおり学校の先生は子どもと関わって、長く一緒に子どもと関わることが自分にとっての仕事の価値観として最上級なものという考えがある様に思えます。それが独善的かどうかという問題はあります。その上にやはり教師の世界は原則的には時間外勤務は命じないことになっています。そのために4%補償がありますので、そういう労務管理を意識しない現場になっていることも事実だと思います。私自身も現場にいたとき、やはりこんなことを言うと怒られますけれども、わりと早く帰る人を見て「あの人はあまり仕事をしないな」みたいなことを感じていたのも事実ですけれども、そんなことを言っていたらこの問題は解決しないと思います。その辺を管理職の先生も含めて意識改革をしてもらわないといけないと思います。

(中貝市長)

まず県教委がやるべきだと僕は思うんだけど、今おっしゃった学校文化。それが合理的な学校文化なのかどうかというところを見ないといけないわけで、さっきのたすきがけの労働時間って、徹底的にそうしている。彼らはそれが正しいと思っていたのだけれど、ちょっと聞くとなんでこんなことをしないといけないのかと。バカの壁みたいな中で閉じこもっちゃうことがあるので、その意味ではこのデータを基に、そうでない人たちが見たときに、その人たちは学校のその現場とやりとりをしながら、どういう意味を持つのか理解しながらやっていくと、実は合理的な解決策がもっと出てくるような気がする。豊岡市の教育委員会としてはどうするのか、ということをやらないといけないと思う。その中でさっきのようなシステムを1つ入れることによって、成果が例えば30分短縮できるとか、1時間短縮できるとか、本当になるのであれば、そういうのはさっさと入れればいい。

(深田委員)

研究しろということですね。

(中貝市長)

意外なことに、生徒指導は小学校の 2% じゃない。イメージとして、ここにごっつい手を取られていると思っていたら、実は他のところで取られているということでしょう。

(こども教育課長)

成績処理なんかは本当に校務支援システムが入って、先生方が使いこなせるようになれば、その辺はだいぶ効率化できる部分ではあるかなと思います。

(嶋教育長)

6月4日から7月15日という設定があまりよくなくて、もう成績処理になっちゃっているの
で、これまでにものすごく手をかけて発達課題のある子とか、あるいは不登校、始まりかけた
頃ですから、ずっとやっているのだろうと思うのだけれど、僕はそんな感じを受けました。

(中貝市長)

ということは、現場がわかっていない人がこれを作っているということでしょう。

(嶋教育長)

そういうことです。

(中貝市長)

それはあかんじゃないですか。また調査し直すとする、また現場が大変になる。それが結
局調査に留まっちゃうから。本当に変えようと思ったら、今の話だったらこの時期に設定する
こと自体が今聞いた範囲ではおかしいと思う。変えようと思っていないのではないか。

(中川委員)

変えたらいいんです。過去に遡ったりする程度では。

(中貝市長)

どう本当に改善するかという、本当にやったことにどういう調査自身の設計をやればいいの
かとか、それを今度は分析したりだとか、解釈する人を、もちろん学校の側のことをわかって
いないといけないのだけれども、そこも逆に言うと、まっさらな目で見れるような労働時間
に関するようなプロフェッショナルみたいな、そういったところの対応をするという仕組みを作
るとか、何かそういうことをやらないといけない。

(こども教育課長)

この調査は4年前にも行っていまして、4年前と同じ対象校に同じ時期でやっている、比較
しようとしている。それまで4年前にもやっているんですけど。

(教育次長)

それらも含めまして、また県教委と話をしてみたいと思います。校務支援システムについては有り難い言葉をいただきましたので、研究を進めていきたいと思います。

[日程4 その他]

(教育次長)

終了の予定時刻に近づいてまいりましたので、協議事項からその他に移らせていただきます。せっかくの機会です。中貝市長と教育委員会がこうして一緒に話ができる場はありませんので、何かございましたら。

(深田委員)

中でもちょっと話が出てましたけれども、学校規模の適正化を考えた場合に、現実的には今就学されている保護者の方々の意識と、就学前の保護者の方の意識との間に少し齟齬があることも事実です。豊岡市の教育課題の1つに上がっている不登校の問題だとか、特別に支援を要する子どもの問題だとか、そういうことを考えると確かに小規模校の中で手厚く子どもの指導をしていただいている今の規模がすごく有り難いと考えられるのも、これも当然だと思います。就学前のお子様をお持ちの保護者の方は、ずっと先長い目で見たら、本当にこの子らが自分らしいところで生きていこうとしたときに、ちゃんと必要なものが心の中で備わっているのだろうかという不安があるのも事実だと思います。そこのところを小小連携だとか、小中一貫教育の中でカバーできる場所がありますので、その研究も今までもずっとしてきましたし、これからはしていかなければならない部分は同時進行的にやっていかなければならないと思います。片方ではそういうことに対する対処というようなものも考えていかなければならない時期にきているのかなと痛感しているところです。

(中貝市長)

教育委員会と学校が信念を持たないといけないのです。今の子どもたちが子どもたち同士で学び合うような場だとか、さっきの班編制をやるときに比較のしようがないというようなことが、どれほど子どもたちの教育にとって意味のあることなのか、あるいは、何回もその場その場のやりくりでカバーできるものであるのかということについて、僕は教育委員会や学校の現場は教育の観点から信念を持たないといけないと思います。そこのところをやっぱりとことん考えずに、区長さんがダーッとたくさん集まる中で、まあまあ来たところがあるので、本当に子どもたちの育ちだとか学びのことについて、それが辛抱できる範囲内に収まるのはいいのですけれども、もしそうでないとすると、やっぱりちゃんと言わないといけない。

市の立場から言うと、統廃合は財政的にはプラスに全くなりません。だから、行財政改革のためにやることは意味がない。だって先生の給料って豊岡市は1円も払っていないです。払っているのは校務員の給料ぐらいでしょう。これが例えば学校が3つになったら3人が1人ですむとか、それだけの話でしょう。光熱費は確かに下がるかもしれない。でもその代わり施設整備が必要となった頃に膨大な金がかかってしまう。それから、遠くなるとそこのところでバス通学やると、こっちのほうがよくかかってしまうので、単なる金の話をすると、学校の統廃合は財政的にはあまり嬉しくないです。お金のことを考えると。なのでそういうことを言って

いるわけではなくて、子どもたちにとってどうなのかということ考えたときに、今の規模でいいのかどうかということをやっぱりやるべきなので、そのために説得の言葉であるとか、考えてもらうような必要な情報はちゃんと出さないといけないと思います。そこをなしに地域の側もボヤッとしたところで、地域の何か活性化の拠点だと思って、学校に一度も行ったことのないような人が平気で言ったりするよね。そういうレベルの議論ではなくて、本当に現場での子どもたちの教育だとかいうことに即して情報を提供して、その上でどうですかねというふうに持っていかないといけないと思うし、教育委員会なり学校の校長先生方は自分なりに信念を持って、そのところでぶつかっていくというのか、その地域の人たちに。そのことがいるのだらうと思います。

[日程5 閉会]

(教育次長)

これもちまして、平成29年度第1回豊岡市総合教育会議を閉会します。

----- 閉会 午後3時40分 -----